

机の上では学べなかったこと

東京大学 大学院 工学系研究科 国際プロジェクト研究室 修士1年

長野 快

土木工学に携わるものとして、貧困削減という社会問題にどのようにアプローチできるのか、本当に必要な技術協力とはなんであるか。学部に入學してからこの問題についてずっと考えてきたが、答えを出せずにいた。それもそのはずである。机に向かい論文を読み、勉強をする。海外に行く時も、観光目的のバックパッカーとしてであった。これをいくら繰り返しても、肌感覚として何が必要なのか見えてこないのも当然である。

そんな折自分が履修していた講義に木村先生がやってきた。土嚢を用いた道路整備法による貧困削減の話の後、今回のスタディツアーの話があった。「机につきすぎて頭でっかちになっていないか」という一言にハッと、今回の参加を決めた。

長時間のフライトの後、ケニアのエルドレットに到着した。人生二度目のアフリカは相変わらず原色の世界であった。だが、今回はただの観光旅行ではない。我々は、ホームステイをしながら農道の整備を行うこととなった。

朝7時に起き現場へ歩いていく。二月であるにもかかわらず、赤道直下であるケニアは日差しが強く、乾燥していた。

作業は土嚢を施設するために道路の轍にあたる部分を掘り、土嚢袋に土砂を入れ、土嚢を敷き詰め、土をかぶせる。そしてその後に締固めを行うという簡易なものであった。現地にある材料を使い、安価で簡易な技術を用いることで、現地の人に主体性を持たせることが出来るものであった。

さっそく作業に取り掛かったが、作業道具はどれも重く、また土は固いため、運動不足の体が悲鳴を上げた。力を込めつけるはしを振るっても一向に進んでいる気がしない。体は火照り、汗は頬を伝った。

一日の作業が終わり、帰ろうと後ろを向くと、そこには確かに自分たちで作り上げた「道」があった。あの風景は一生忘れないと思う。言いようのない達成感と、土木本来の意味を知ることが出来たと思う。

また、滞在中の生活も素晴らしかった。ホスト



作業風景、ケニア人の体力はすごかった



Victor、毎日いろんなケニアを見せてくれた。

ファミリーは Victor 家であり、母、弟、妹の4人暮らしであった。Victor は本当にいい奴で、毎日いろんなところに繰り出した。作業で疲れ果てたはずなのに、それでも飽きずに毎日夜中まで遊び、泥のように眠った。そして朝起きては現場に出かけるという日々だった。食事もうまく、早寝早起きの生活をし、心身ともに充実した日々を送った。

また、素晴らしい出会いもたくさんあった。CORE 事務所の喜多さん、松本さん、マトマイニの菊本さん、道普請人の酒井さんは国際社会の最前線で仕事をしている方で生きた現場の話を聞かせていただいた。特に喜多さんは寝室も一緒だったこともあり、毎晩夜遅くまでいろんな話をしていただきとても刺激になった。

今回のスタディーツアーでは、他にもたくさん素晴らしい経験をした。

訪れた小学校では、突然現地の先生に頼まれ、子供たちに「ケニアと日本の違い」ということで社会の授業を行った。サファリでは目の前でライオンを見ることが出来、マトマイニでは子供たちとの交流や、スラム訪問を行った。



小学校で行った授業風景



サファリにて、ライオンはさすがの真顔だった

今回の旅行を通し、途上国=可哀そうという先進国の考えは成り立っていないことを感じた。確かにインフラ不足やスラムの拡大などの貧困問題など、社会的問題は確かにある。しかし、その土地に住む人たちは明るく、楽しそうに暮らし、先進国の人以上に生きていた。作業現場は笑顔であふれ、日本ではあまり見られなくなった人々の交流が確かに残っていた。

これらの経験、人々との出会い、現地の雰囲気を感じられたことは、いくら机についても手に入れることのできなかった経験であり、今後の国際開発の在り方、自分の将来や研究の方向性を考えるうえでかけがえのない財産となっていくと思う。

最後になるが、今回このような機会を与えてくださった木村先生、現地事務所でお世話になった喜多さん、松本さん、現地スタッフのみなさん、Victor、マトマイニの菊本さん、そして今回のスタディーツアーで同行した酒井さん、梶山さん、瀧川さん、関わった全ての方々に厚く御礼を申し上げ締めくくりとさせていただきます。